静岡新聞

平成２４年(2012年)４月６日（金曜日）　読者のページ（２４）

（第三種郵便物認可）

時評

佐藤洋一郎
総合地球環境学研究所副所長・教授

小さな物質循環

排泄物、そのまま資源に

人は幼児期には「うんこ」に親しみすら覚えているのに、長ずるにつれ、遠ざけ、忌み嫌うようになる。それは昔からのことらしく、芥川龍之介の短編小説「好色」には、片思いの女性のそれをみることで思いを断ち切ろうとする、ある男の涙ぐましい努力が描かれる。しかしそれはかつては、トイレに貯められ肥料に使われる資源でもあった。あらゆる物質が、ときには野菜、ときにはうんこという形をとりながら小さな環を描きながら循環していた。うんこは嫌われつつも、同時に資源としてなくてはならないものだった。

最近は、水洗トイレの普及でうんこは水に流される。トイレ自身もきれいになり、かつて「御不浄」と呼ばれたイメージはもはやない。排泄されたものは地下の下水管を通って処理場に運ばれ、分解され、薄められ、最後には海に運ばれる。「臭いものにはフタ」というわけだ。物質循環の環は今ではうんと大きく、ほとんど一方通行にさえみえる。こうなると資源という側面は薄まり、うんこはますます汚いもの、忌み嫌われるものになってしまう。

しかし地球の環境を考えれば、大きな環の循環は大きなエネルギーが伴う。分解し、薄め、拡散し、資源として使うときには大量に集め、再度濃縮し、肥料として植物に与えているのだから。拡散―再濃縮のプロセスが省ければ、環境にはぐんとやさしくなれる。そう、うんこはうんことして、あるいは家畜のエサとして使えばよい。かつてミャンマーの田舎の村で、野外の簡易トイレで豚に襲われそうになったことがある。狙われたのは、いうまでもなく私の排泄物であった。備えつけの竹の棒で豚を追い払ったが、「短い環」はあそこではまだ生き続けていたのだ。

うんこは伝染病を運ぶ厄介者でもある。だから適切な処理が必要だとの意見もある。それには賛成だが、それならそれで安全でより有効な短い環を考えればよい。それが技術というものだ。何でもかんでも大きくすればよいというのは「右上がり社会」の論理だ。これから訪れる縮小社会では、今までにはなかった新たな発想とそれを支える技術が要るのだと思う。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「コシヒカリより美味い米」（朝日新書）など。